

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第90号

2014年9月



第135回自然観察会～早稲沢夏の山岳植物観察会に参加して 渡辺 京子

7月6日(日)参加者12名-女6名-男6名

梅雨の中の奇跡的な1日、朝から良い天気。

7:30 四季の里駐車場

9:05 早稲沢登山口出発。すぐに沢沿いに、シダが、リョウメンシダ、サカゲイノデ、ジュウモンジシダ、イヌガンソクなどの観察をしつつ沢沿いの道を歩く。木洩れ日の中のそよ風が嬉しい。

オヒョー！カツラ(桂)などと騒ぎながら布滝へ、滝の英気を貰い、シヨウキラン、サイハイラン、コケイラン、オオバタケシマラン、ツルアジサイ、サナギタケなどを観察。

11:40 ブナ林にて昼食。皆さん持ちよりの料理で大宴会。自宅の昼食より沢山料理がある。((笑))お腹が膨れてザックの紐を弛める。

12:20 デコ平湿原に向け出発。湿原には、ワタスゲが、ホソバノキソチドリ、ハクサンシャクナゲ、ツルコケモモ、イ



オオバミジホオズキの残り花一輪



サナギタケ



思わぬ発見

ワガラミ、モミジカラマツなどを観察。マタタビは少し頂いて帰り、猫にプレゼントしたら、葉を噛んでゴロゴロ、木より葉が好きのようです。

百貫清水では、湧き出る水を頂き、ひと休み。

15:15 早稲沢登山口着

歩きながら、サワハコベとタニギキョウの違い。クルマバソウとクルマムグラの違いを、触ったりして教えていただきました。

他にも沢山の植物がありましたが、覚えきれません。又、教えて下さい。今回の観察会で気になる植物があったので、調べて見ました。

サナギタケ(蛹茸):冬虫夏草属

チョウやガの蛹から生じる冬虫夏草類の一種。日本では夏に発生。(途中カット)とくにブナの葉を食べて育つ、ブナシャチホコというガの大発生時の翌年には、そのガの蛹の9割以上がサナギタケの感染を受け、サナギタケの大発生が起きることが知られている。特に東北地方のブナ林では、1平方メートルあたり33頭の蛹からサナギタケが生じていたという記録がある。このため、この菌は、ブナアオシャチホコが増えすぎたときに調節する天敵としての役割が大きいと考えられる。ブナシャチホコ以外の蛹からも生じる。(森林生物図鑑より)

薬効成分に、コルジオピンという成分を含んでおり漢方薬として利用される。コルジオピンは抗がん剤(抗腫瘍性抗生物質)なので、無菌カイコの蛹にサナギタケを植え付け、抗がん剤の治療薬を作り、売られていました。他にも、もっと色々な事が書いてありました。

今回、サナギタケを蛹付きで見ることが出来ました。一つ見つけると良く見えるもので、あちこちにサナギタケがありました。興味深い植物だなあと思いました。



散策路はブナの実で蔽われていた



ツルアジサイ



片側だけ成長したブナの枝



ヤグルマソウとイカリモンガ



ブナ平は観察ポイントがいっぱい



デコ平湿原はワタスゲの果実が見頃でした



オオハナウド



ミヤママタタビ



シロバナトウウチソウ

現在の仕事といえるものは、庭の草むしり位です。自然観察会に中々参加できないので、我が家の自然について報告いたします。

1 動物編

① スズメバチ

一昨年の秋、生垣に絡みついたヤブカラシの蔓を引き離したところ、その陰にラグビーボール大のスズメバチの巣があり、下部の出入り口の穴から出てきたキロスズメバチが不気味な羽音をさせながら頭上を旋回し、いつ



でも襲い掛かるぞといった態勢でした。これは危険と地面を這いながら後退し、安全と思われるところで立ち上がり逃げ帰りました。多少経費がかかりましたが、命あっての物種と業者を頼んで駆除しました。

昨年の夏、やはりヤブカラシの蔓を取り除こうとしたとき、突如上唇に蜂の一刺しを受けました。瞬間顔全体がかっかど熱くなり、痛みが口のなかに広がりました。直ぐに近くのクリニックで処置してもらい、事なきを得ました。昔ある女性が言った“蜂の一刺し”を思い出しました。

さて今年は春、雪解け期に庭木の剪定と合わせて生垣の刈り込みを、シルバー人材センターに依頼しました。

作業を始めて直ぐに写真のスズメバチの巣を持ってきました。蜂が全部飛び去って空だから良かったものの、これに蜂が入っていたら大変でしたよ、と。巣のあった場所は、昨年蜂に刺された場所の直ぐ近くで、そこで仕事を止めたから良かったものの、そのまま続けていたら、大事になっていたかも知れず、何が幸いするかも知れません。

② 狸



家の右側の生垣をくぐり、庭を横切って左隣の庭に入って行ったり、向かいの家の方に行ったりする茶色の小動物が時々姿を見せます。猫ではなく、小型の犬のようですが犬でもなく狸と思われます。最初は1匹でしたが、その後2匹で連れ立って現れるようになりました。狸は夜行性なので中々見ることはありません。子狸が夢中で遊んでいるうちに、家に帰る道を見失ってしまい人里に迷い込んでしまったのか。近くの道路で親狸が交通事故にあって死んだとの話を聞き、その子供なのか。いずれにしても小さな兄弟で、住処を離れた異郷の地で、必死で生きていこうとしている姿に哀れみを覚え、早く住処に帰り、一族、仲間と楽しく暮らすことを願っています。それにしてもここ暫く姿を見せないのはどうしたことだろうか。

2 植物編

① 食用山菜

ワラビ

20年前今の宅地にする前、空き地にしていた場所にワラビが生え、小人数で食べるには十分に採集できました。宅地として約1メートル埋め立てましたが、10年ほど前から又ワラビが生えてきました。10年経って1メートル下から生え出してきたのか不明です。だがここ2・3年不作で雑草に負けたのか、環境を整備しなければと思っています。

コゴミ

2株知り合いから貰って庭の片隅に植えたのが毎年増え、10株以上になりました。土地が合ったのか毎年思わぬところから芽を出します。一度だけ胡麻和えにして食しました。

カンゾウ

先日テレビを見ていたら、カンゾウの茎を食材として料理しているのを見ました。家の庭にもノカンゾウが毎年困るほど生えてきます。どの種類のカンゾウが食用になるのか、料理法は知っている方がおりましたら教えてください。トリカブトとかバイケイソウのように猛毒の植物もあるので。

② 食用樹木

タラの芽

タラの木は伸びた地下茎から思わぬところから新株が生えてきます。毎年天ぷらにして食しています。次々と新株が増えるので、知り合いに分けてやりましたが、そのうち親株が枯れてしまい、新株も生えなくなっていました。1本だけ残ったのが、今年も新芽を芽吹きました。これを次世代の親として新世代を繁栄させたいと思い採芽は一食分だけにしました。盛んに枝葉を伸ばしています。

サンショウの木

庭のあちこちに生えています。意識して植えたのは2本だけなので、後は小鳥のお土産でしょうか。そのうち実のなるのは1本だけです。“山椒は小粒でもぴりりと辛い”というので 歯で潰してみましたら、口がしびれるようでした。毎年鯿の山椒漬を作っています。

③ 果樹

グミ

青い葉の間から真っ赤な実がぶら下がっています。グミには何種類かがあるが我が家に有るのはナツグミか。丁度今が食べ時である。子供の頃どこの家にも1本ぐらいいはあって、木に登って食べたものでした。シブグミといて、あまり食べると尻が詰まると言はれたものでした。手の届く所の2・3粒を食べ子供の頃の郷愁を感じました。

ビワ

去年は不作だったが今年は豊作のようです。シルバー人材センターに依頼した剪定で花の咲いていた枝が大分切られてしまったが、下のほうが残って今青い実をつけています。毎年鳥との競争で、少し色付いたから明日あたり食べ頃かなと思っていると、翌朝もう鳥にやられて地面に落ちてしまっています。鳥は早起きで毎日観察しているので、どうしても負けてしまいます。さて今年は何日かが勝負です。

④ 樹木

ナラ、ケヤキが葉を茂らせています。これでどれだけの酸素をこの地球にもたらしているか、毎日眺めています。実生やひこばえがあちこちに生えています。なかにはさつきなどの中に入り込み他の樹木の生長を邪魔しているのもあります。掘り出して捨てようかとも思っていますが、せっかく生えてきたものを切り捨ててしまうのは可哀そうなので、誰か希望者がいれば差し上げますので申し出下さい。

鹿狼山から 30 ～ヤマユリの戦略～

小幡 仁子

9月になって、鹿狼山も秋の気配がしてきた。タマアジサイが終わって、紫色のコバギボウシが登山道沿いに点々と並ぶと、今年も秋がやってきたと思う。そのコバギボウシも盛りは過ぎていた。センニンソウもいつものようにアセビの上に白いベールを広げていて、赤いミズヒキや黄色のキンミズヒキがあちこちに咲いていた。キツリフネもあったし、シロヤマギクやオトコエシ、ヤマジノホトトギスも白く存在感を出していた。うれしいことに、クサボタンが花びらをくるんとさせて、かわいい薄紫色の花を咲かせていた。鹿狼山は色とりどりでなかなかの賑わいであった。

樹木の方はどうなったかと思えば、オトコヨウゾメにはオレンジ色の実がついていた。もう少しすると赤い実に変ることだろう。今年は山頂直下のヤマボウシの実が豊作で、日当たりが良いせいかわずいぶん濃いピンク色に熟していた。一緒にいた姉が、あれは何の実かと聞くので、あれはヤマボウシの実だよ。お猿の大好物というから食べてみたことがあるけれど、ちょっと甘くてぬるぬるしていて、そう美味しくはないけれど、お猿が山で食べるものとしてご馳走だと思ふよと答えた。私たちが幼い頃は近くにヤマボウシの木はなかったので、姉はヤマボウシの実を見た

ことがなかったのである。そして姉は「私も食してみたい」と言うのだった。山頂直下のヤマボウシには近づき難いので、登山道沿いにあるヤマボウシの所に行った。たった一つだけ実がついていたので、二人でよしよとストックを伸ばして取ってみた。本当に食べるのかと思ったら、ちょっとかじって「なるほど甘いわね」と言って、後はぷつと吐きだし、残りをポイッと放り投げてしまった。あまり美味しくはなかったのだろう。放射能値が高いかもしれないし・・・。

私たちが小さい頃は、たとえばサガリコと言っていたウグイスカグラの実は、甘酸っぱい味がして、秋のお楽しみだった。その他、スグリコやキイチゴやイチジク、ヨツズミと言っていたのはガマズミの実だ。みんな子供のちょっとしたおやつだった。虫が入っていたり熟していないものもあって、苦かったり、渋かったりするものだから、投げたり吐きだしたりしたものも多かった。それでも、外遊びばかりしていた私たちの世代は、野にある草木の実を口に入れるのにそう抵抗はなかった。

考えてみると、猿やイノシシ、鳥などの動物は果実が美味しければ喜んで食べ、その種を遠くまで運ぶわけだから、植物は種の繁栄をかけて美味しい実を育て、食べてもらうのを待っているに相違ないと思う。人間の子供だって昔はそういう運び屋動物の一部だったということだ。

さて、鹿狼山にイノシシが増え、ヤマユリの大株がなくなったことを、私はIさんに話した。Iさんは植物に大変詳しく、色々なことを教えてくださる方だ。Iさんは事も無げにこう言った。「あのね、イノシシがヤマユリの球根を食べるのは、ヤマユリの戦略ってことよ。というのは、イノシシの食べ方は本当に雑で、食い散らかすから、球根が飛び散って、そこから新しい芽が出てくるらしいの」ということだった。そうだったのか！と私は目から鱗が落ちた気分だった。ヤマユリはイノシシに食べてもらうのを待っていたのか！だったら、鹿狼山にヤマユリの花が少なくなったとしても、そうがっかりすることはなかったのだ。ヤマユリの球根も他の果実と同じように、種をいかに繁栄させるかの戦略を持っていたのである。

ただ、この度の原発による放射能汚染が原因でイノシシは増えているわけだから、自然界のバランスは崩れているかもしれない。イノシシがあまりにも増え、ヤマユリの球根を食べ尽くしてしまえば、消えてなくなるかもしれないと思ったりもする。それに飛び散った球根から芽が出て花開くまで何年かかるだろうか。飛び散ったまま消えてなくなる方が多いだろう。そんなことを思うと、登山道沿いのちっぽけなヤマユリまでがやけに目につくようになった。これは種子から発芽したものなのか、それともイノシシが食い散らかした球根から出てきたものなのか、どっちなのだろうか。そして、何年後に花咲くのだろうか。

ヤマユリにしても、他の植物にしても、種を残し次の世代に繋いでいくために様々な戦略を持っていることは確かである。生き物の世界は本当に奥が深い。季節折々に色々なことを教えてくれる鹿狼山である (2014/09/17 記)。



コバギボウシ



シロヤマギク



キンミスヒキ



オトコユウメの実



このヤマユリは花開くのか？

「大震災が教えてくれたもの」(11)

福島第一原発から20kmの懸森山を歩いて思ったこと

奥田 博

2014年4月某日、南相馬市小高区の毘沙目木から懸ノ森を周回した。途中の林道は、大規模な土砂崩れのままで、震災の爪痕がそのまま残っていた。上部の雑木林は健在で、林床は多少藪が煩くなったような気もするが、ブナ、コナラ、シデなどが明るい輝きを放っていた。一帯は原発から20km、北西に伸びる汚染地帯に掛かっており、現在でも線量は非常に高いが、腑に落ちない数値でもある。周囲の林道や好ましかった雑木林などは一律に3~4 μ Sv/h(最大4.65)、さらにどこの山でも低いハズの山頂が3.68 μ Sv/hもある。要は、周囲と山頂の差は大きくない。これは原発事故初期の頃に見られた現象。現在は、山頂部は周辺に比べて、極端に低くなっている。これは前号の日隠山でも述べた通りだ。漠然とした疑問が、7月の新聞記事で氷解した。昨年、小高区・原町区で収穫された米から基準値を超えた問題は、2013年8月19日、3号機のがれき撤去作業の粉じんが作業員2人が被ばくした事実から、粉じんが風に乗って飛散し、コメに付着したと判断された。東電は、事実を公表しないでいた訳だが、この粉塵飛散は、この山林にも当然降り注いでいたと考えるのが妥当だろう。どの範囲に飛散したのか、事実を知りたい。不思議なのは、県が設置している線量モニタリングポストのデータは何の反応も示されていない。よもやデータを隠してはいるまいが。

原発再稼働に向けて、動き出している。世界を揺るがした事故の検証はまだ終わってはいない。一連の現象の正確な分析、特定するレベルの責任の所在まで突き詰めて、本当の意味の「再発防止」策につながる。原因究明を曖昧に闇に葬り去り、再稼働はあるまい。

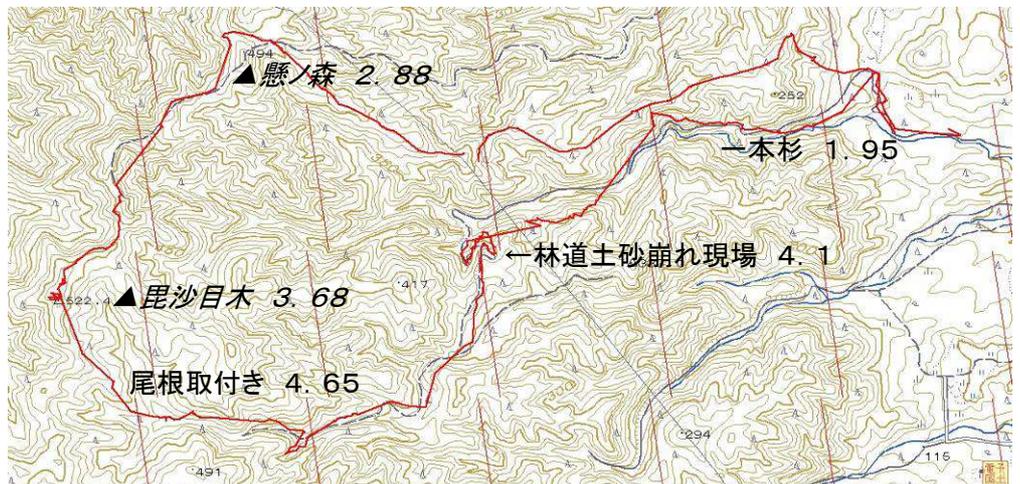
これまでの原発の常識もゼロベースで検証し直してみることも必要だ。発電コストが安い、CO₂を排出せず環境に優しいというのは本当なのか。今回の事故の後始末にかかる費用は、果たしてどのくらい巨額になるのか、できるだけ正確に見積もる。使用済み核燃料や老朽化した原発の廃炉コストなども、事故前と今とでは条件が大きく変わったので、計算し直してみる。さらにCO₂増加と原発事故の環境への負荷を比べてみる。直接的な発電コストに廃炉そして使用済み核燃料の廃棄コスト、更には事故に伴うコストを加えればより正確な原発電力のコストが求められるはずだ。その結果、予想以上の高コスト電力となるかもしれない。これまで既にチェルノブイリ、スリーマイル島、福島と三度の大事事故が起こっているのが原子力発電の実体だ。今後は自然災害のみへの対策に止まらず、テロ、誤操作といったものにどう対応するのも大きな課題だ。以前にも述べたが、廃炉作業で事故が起きたことを想定した訓練は、今年9月1日の防災の日にも、福島県のどこの市町村でも行われなかった。原発事故は過去のことように自らが風化させている。

福島の原発に関しては、廃炉作業が30~40年は継続される。溶け落ちた燃料を取り出すまでは、長い年月を要する。その時に、ただ一度の作業の失敗は、今回の事故以上の結果をもたらすかも知れないことを肝に銘ずるべきだ。3号機のがれき撤去作業の粉じん飛散事故レベルの軽度の事故も、風向き次第では人の住む川内村や楡葉町、いわき市北部や南相馬市北部までも及ぶ可能性を示している。たまたま風向きは、原発事故時と同じ方向に吹いただけだ。

10月には福島県知事選挙が行われる。耳触りのいい言葉に惑わされることなく、福島のみならず日本の原発をどうするのか、それを先頭に立って動く福島県の首長を選びたい。



震災で大規模な土砂崩れの林道



シオガマギク (*Pedicularis resupinata* var. *oppositifolia* ハマウツボ科シオガマギク属)

ブナ林から偽高山の草地に植生する多年草。イネ科植物などの根の木部に寄生根を侵入させる半寄生植物。藤井紀行(熊本大学理学部)氏の葉緑体 DNA 分析によると、東北地方のシオガマギクの DNA タイプは関東以西とは異なっている。また、中部山岳地帯から採取したトモエシオガマの DNA タイプとも一致しないことが明らかになっている。シオガマギクの変種であるトモエシオガマが鬼面山に植生するとの報告があるが、鬼面山にだけトモエシオガマが隔離分布するとは考えにくく、シオガマギクとした方が良くもしい。

葉は下部から上部に向かって対生から互生に変化するのが一般的だが、先端まで対生のままの個体もある。鬼面山ではこのタイプが多いようである。トモエシオガマの葉の着き方は互生である。シオガマギクの変種名 *oppositifolia* は「対生葉の」と言う意味であるのでシオガマギクとトモエシオガマの区別は葉の着き方が基準となると考えてよいだろう。葉形は三角状狭卵形形で先端は尖る。葉の表面は毛じの脱落痕が認められる。葉縁は重鋸歯がある。葉脈は主脈から深い側脈が平行に走る。

花は、頂腋性で総状花序を形成する。茎の先端に白い軟毛で被われた苞葉を数段対生し、その腋に2唇弁花を着生する。ガクは2裂し、花は基部からねじれて反転するため、唇弁の位置関係が逆転する。上唇は筒状で先端は湾曲し、鳥のくちばし状になり、先端から柱頭が除く。下唇は3裂し、中裂片が小さい。雄しべは4本で、2本が長い。花色は下唇が平開する前は全体に桃色であるが、下唇が平開すると上唇は紅紫色を呈する。鬼面山のシオガマギクには頂部だけに花序を形成し、花序の形態だけに着目すれば節間がつまり限りなくトモエシオガマに酷似する個体や株全体の各葉腋からトモエシオガマ状の花序を形成する個体が見られ、花の着生様式は多様で、花の形態でトモエシオガマと識別するのは無理があるように感じている。

よく観察すると鬼面山の個体は葉と花の着生様式が多様で、変幻自在の印象を持たせる不思議な植物である。

シラネニンジン (*Tilingia ajanensis* セリ科シラネニンジン属)

吾妻・安達太良山域の日当たりの良い偽高山帯の草地や湿地および岩稜に植生する多年草。吾妻・安達太良山域に植生する多くのセリ科植物の中で、最も標高が高いところに分布する代表的な高山性植物である。しかし、イワカガミなどと比べてシラネニンジンにはあまり注目されることの少ない植物ではないだろうか。

葉は互生。セリ科の葉は着生様式で根生葉と茎葉に分かれる。シラネニンジンの茎葉は3葉以内で、欠く個体も見られる。茎葉は2回羽状複葉で葉柄は赤味を帯びた鞘状を呈し茎を包む。根生葉は3回羽状複葉で全裂する。小葉裂片は不規則で葉身は無毛。裂片の幅は個体差がある。茎には稜があり白い細毛が着生する。

花は頂腋性で、直立した茎の先端やその下の茎葉部に複散形花序を形成する。小花の花弁は5枚、花色は白である。花弁の形は5枚とも同形である。雄しべは5個、葯は赤い。雄しべの葯の色はミヤマセンキュウなど他のセリ科の花より鮮明である。雌しべは合着型の2心皮性で基部には半円形にくびれた花盤を持つ。開花の際は、始めに花盤が現れ、雄しべの葯と花糸に花弁が押し広げられるようにして開花する。花弁の先端は開花後も内側に湾曲する。開花直前の花は、花弁の間から、赤い葯がのぞく。花心部の透明感のある花盤、それを囲む白い花弁と間からのぞく赤い葯で構成された五角形の姿は端整で美しい。また開花すると爽やかな芳香を放つ。私はこの香りを嗅ぐと何故か春の農村風景を連想する。

セリ科の花は雄ずい先熟性であり、花は開花中に雄性期から雌性期に相転換する。花は開花すると雄しべの葯は花粉を出して間もなく落脱する。葯が落脱すると、花盤の分岐部からそれぞれ1本づつ花柱が伸びる。

シラネニンジン花には夏登山の度に何度も出会っているが、シラネセンキュウやシシウドなどの他のセリ科植物に比べて花、草丈ともに小型であることから控えめな花の印象をもっていた。最近、開花直前の小花の姿はセリ科の中で最も自己主張が強いことに気付いた。改めて自然は未発見に満ちていることを思い知った。



第137回自然観察会案内：狐郷山(239.6m)・里山の陽だまり観察会と総会

日時：2014年11月30日(日)8:00～15:00

集合場所 小島の森第一駐車場 集合時間 8:00 参加定員 30名(総会は定員なし)

総会会場:福島市立子山自然の家(960-1321 福島市立子山字金五作1 024-597-2951)

内容:午前中は飯野町・狐郷地区の古峰、狐郷山を散策します。生業に係る石碑類が豊富です。蛇霊もあり狐と蛇の組合せは珍しいかも。山頂には、三等三角点があります。午後は立子山自然の家で総会です。

準備するもの:昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、食器、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など(ルーペ・双眼鏡・各種図鑑)

*その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費:保険代(320円) 申し込み:11月29日(土)まで

参加申込先:佐藤守(024-593-0188:午後7時～9時)へ電話またはメールにてお願いします

西吾妻登山道誘導ロープ取り下げ作業ボランティア(NF米沢と共同:詳細は佐藤守まで)

1. 実施日:10月18日(土)7時00分～17時30分(雨天時10月19日(日)に順延)
2. 定員 :5名(山岳での行動において自己管理のできる方)
3. 内容 :デコ平湿原駐車場から西大巔を經由し、吾妻小屋でNF米沢と合流します。
4. 集合場所・時間:四季の里正面入り口駐車場(あづま橋側) 7時00分
5. 申し込み:10月13日(月)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします。

苗場山・平標山の山岳保全管理に学ぶ

夏の終わりに仲間と苗場山と平標山を訪れた。苗場山はその景観がまるで「神様が苗を植えた場所」のようであることから名付けられたとされ、その山頂には10平方キロメートルにも及ぶ高層湿原が広がる。湿原には数百をこえる池塘があり、そこにはミヤマホトタイが群生していた。また、湿原ではヤチスゲ、ショウジョウスゲなどに混じってイワショウブの花と果実が紅白の彩りを添えていた。

踏査した祓川コースは、登山道のほとんどに木道が敷設されており、山肌に直に触れながら歩く感触がそがれるのがさびしい。休憩ポイントの要所には大きな木造のテラスが設置されその規模からこの山の人気度が推し量られる。出会った登山者は圧倒的に若者と家族連れが多い。急登を凌ぎ、たどり着いた湿原にも山頂まで木道が敷設されていたが、山頂に至るまでほとんど湿原の崩壊が見られないことに驚いた。人気度が高いだけに、早くから湿原保護対策が徹底されていたのだろうと想像した。しかし、帰宅後、調べてみたら長野県側からのルートでは湿原の崩壊が問題になり、湿原を迂回するルートに変更した事例もあることが分かった。この事例では自然保護団体と県、地元自治体、環境省、大学の植物専門家との合議の上で対策が決定されている。

当会では2000年より西吾妻山城の登山道保全に取り組んでいるが、湿原に加え、西大巔山頂付近の斜面崩壊という難題を抱えている。今年は、ネイチャーフロント米沢の支援もあり、置賜森林管理署と裏磐梯自然保護官事務所に現地説明を実現することができ、ようやく関係機関による協議の場を設ける環境が整いつつあるところまで来ているが、苗場山の事例を知り、何とか新たな一歩を踏み出したいと思った。

平標山山頂で落ち葉をあしらったしおりをいただいた。しおりには中越森林管理署の記載があった。翌日の苗場山で再び同様のしおりを配布する集団に出会った。調べてみると、中越森林管理署には森林保護員(グリーン・サポート・スタッフ)という山岳保全管理活動を行う集団が組織されていることが分かった。また、平標山の登山口では「ペット連れ登山自粛」を呼びかける張り紙があった。これらの事例は、東北の山岳自然保護でももう一歩踏み出すべきことが有ることを感じさせられた。



新年度の会費納入をお願いします:郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第90号 2014年9月発行

編集・発行 : 高山の原生林を守る会 HP : <http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先 : 佐藤 守 Phone 024-593-0188 (夜間7時～9時)

郵便振替 : 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法 : 年会費(500円)を添えて上記まで

編集 : 佐藤・奥田・鈴木